



北方民族博物館だより

No.116



HR1.9 ガラガラ アサバスカン・インディアン／ノーザン・トゥショニー
カナダ／ユーコン準州／ペリークロッシング 23.5 x 5.0 x 3.5 cm
Kenneth McGinty, Rosemary Sam氏製作 (2019年製作)

儀礼や歌で用いられるガラガラである。作り方は、初めに革を縫って袋を作る。それを水で湿らせてから、砂を詰めて乾燥させる。完全に乾いてから袋の口から砂を抜き取る。すると袋が空洞になって固まったものが出来る。そこに小石などをいれて、柄を取り付けて作られる。実際に使われるものは袋の部分がもう一回り大きい。本資料は材料の都合により小さなものを制作してもらったものである。

目次 Contents

- 1 表紙 ガラガラ アサバスカン・インディアン／ノーザン・トゥショニー
- 2 企画展「北のファーストネーションズ～北米北西海岸の人びと」
- 3 ロビー展「モンゴルの風景：遊牧世界の子どもたち」
／解説会「遊牧世界の子どもたち」
- 4 ロビー展「オホーツクシリーズ⑬ 北の状景から」
／講座「サハ共和国での調査から」
- 5 講習会「はじめての歩くスキーツアー」
／令和元年度（2019年度）博物館収集資料について
- 6 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

企画展

北のファーストネーションズ ～北米北西海岸の人びと

2020.2.1-4.5

会場：当館特別展示室

北アメリカ大陸の北太平洋沿岸部には豊かな海洋資源に支えられた北方民族の世界が広がっています。中でも主にアメリカ・アラスカ州ヤクタット湾からカナダ・ブリティッシュコロンビア州を挟み、アメリカ・ワシントン州あたりまでの沿岸部一帯は北西海岸と呼ばれ、北方世界において、特に多くの民族が密集して暮らしてきた地域です。本展では北西海岸北部のトリングット、ツィムシアン、ハイダという3つの先住民の伝統的な文化を紹介しています。

北部の3民族は社会組織や芸術様式の点で、中部以南の民族と異なっています。また歴史的経緯により3民族の居住地がアラスカ州とカナダ側に分かれているのも特徴の一つと言えるでしょう。なお、本展のタイトルになっている「ファーストネーションズ」はカナダ側で、旧来の「インディアン」に代わり用いられている言葉です。

本展は自然環境、生業と食、社会構造、衣服、ポトラッチ、バスケット、カヌーと交易、芸術というテーマに沿って当館所蔵資料から3つの民族の文化を紹介しています。

北西海岸は暖流の影響により高緯度のわりに比較的温暖な気候です。自然環境コーナーでは北緯58度のアラスカ州ジュノーと北緯44度の網走市を比較できる雨温図を作成しました。ジュノーの年間降水量は約2340mmと、網走の約3倍です。平均気温は、夏季は網走市の方が高いですが、冬季になるとジュノーの方が暖かいということが分かります。こうした気候により、北西海岸沿岸部はシーダー類などの巨木がそびえる森林が広がっています。

河川には5種のサケが遡上します。サケは燻製などにされ貯蔵されました。サケの卵（イクラ）も食されました。また3民族の暮らす北部地域には、ユーラコンという油分を多く含む魚が遡上します。ユーラコンから取られる魚油は珍重され、交易品としての価値もありました。また春にはニシンやオヒョウも多く漁獲されました。漁業以外にもアザラシ類などの海獣狩猟、シカなどの陸獣狩猟、貝類、海藻、ベリー類などの採集が生業活動として行われてきました。本展では食や生業活動を食器類や生業具により紹介しています。

こうした豊かな食料資源と貯蔵技術を背景に、北西海岸では貴族・平民・奴隷といった階層化した比較的大規模な社会が営まれていました。3民族の社会では構成員が婚姻規則を通じ、2つないしは4つのグループに分けられています。結婚は自分とは異なるグループの人物と行われ、子供は母親と同じグループに属します。民族ごとに細部は異なりま

すが、こうしたグループはさらに「家」などの複数の小グループに分かれていました。

こうした小グループの最も重要な財産の一つが「紋章」です。紋章は様々な動物や自然現象などの図像であり、身の回りの様々な物に刻まれたり描かれたりしました。一部の紋章は特定の一族に独占的に所有され、紋章は所有者の所属や社会的地位を示す記号でもありました。本展ではこうした特徴的な社会構造を、紋章が描かれた様々な資料を通じて説明しています。

紋章はしばしば「晴れ着」にも描かれます。北西海岸では温暖な気候を反映し、普段着は比較的シンプルな衣服が使われましたが、儀礼などでは非常に手の込んだものが使われました。

誕生、結婚、死といった人生の節目や、家屋の新築やトーテムポールの建立といった様々な機会に催される祭宴、「ポトラッチ」ではこうした晴れ着が着用されました。ポトラッチは生業活動が落ち着く冬季を中心に行われ、主催者側から招待客への食物の提供や贈り物が伴います。ポトラッチは主催者の名誉とも強く結びついていました。ポトラッチを通じて名誉ある特別な名前や新たな社会的地位を得ることが出来たと言われています。ポトラッチは様々な変遷を遂げながら現在も行われています。本展ではポトラッチで用いられる衣服や楽器などを展示しています。



会場の様子

展示の後半では交易活動とアートを主に紹介しています。複雑な海岸線を持つ北西海岸ではカヌーによる水上交通が発展し、様々な物資が交換されていました。こうした交易活動をカヌーや櫓を通じて紹介しています。

また精細なバスケットや彫刻の制作は現在も行われています。1960年代以降はシルクスクリーンなどの新たな技法による創作活動も行われており、これらは芸術作品として高い評価を得ています。3民族の暮らす北西海岸北部は、卵型やU字型などの基本図形を複雑に組み合わせでデザインを組み立てる「フォームラインシステム」が発明され、発展した地域とされています。

さらに会場では彼らの世界観の一端を、トリングットとハイダの神話に基づく2つのアニメーション作品により紹介しています。子供から大人まで、多くの来館者が熱心に鑑賞してくださっているようです。

(学芸グループ 野口 泰弥)

ロビー展

写真展 モンゴルの風景
：遊牧世界の子どもたち

2019.11.23-12.15

NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ理事長の西村幹也氏が2011～2019年にモンゴルで撮影した、遊牧民族モンゴル・カザフ・トゥバの子どもの暮らしと風景の写真30点を展示しました。

NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあは、2008年にNPO法人格を取得後、モンゴルへのツアーの催行や遊牧文化を伝えるコンサートツアーの開催などを通じて、北方アジア地域にくらす遊牧民の智恵や経験に関する情報発信を続けています。

理事長の西村幹也氏は、長年の活動がモンゴル国によって認められ、友好勲章を授与されました。展示写真のなかから、1枚紹介しましょう。



タイトルは、「これが私の宝物たち」。キャプションには、「『いいものを見せてあげるね。私の大切なモノたちなの』とチムゲーは私の手を引きながら河原にやってきた。『ね、これね、携帯電話みたいでしょ。すてきに平らなのよ。で、綺麗なの。で、これはね、私のノートね。とってもキラキラしているでしょう。えっと、これは…うーん。とにかく、綺麗なの』と、いろんな形の石を指さして彼女は延々と説明する。その瞳の綺麗なこと、綺麗なこと…。(2016年7月フブスグル県ツァガンノール郡)」とあります。

この写真1枚を見ても、モンゴルの子どもたちの暮らしが創意工夫に富んでいることがわかります。

本ロビー展は、671名の方に観覧いただきました。

(学芸グループ 種石 悠)

解説会

遊牧世界の子どもたち

2019.11.24 13:30-15:00

講師：西村幹也氏

(NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ理事長)

ロビー展「写真展 モンゴルの風景：遊牧世界の子どもたち」の展示写真を撮影した、NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ理事長の西村幹也氏をお招きし、解説をお願いしました。



説明をお願いしました。

西村氏は、モンゴルでフィールドワークを行うとき、どうしてもカメラが子どもたちに向

講師の西村幹也氏 いてしまう

といいます。そして、モンゴル遊牧民の子どもたちは、本当によく笑うのだそうです。西村氏が撮った展示写真を見ると、屈託のない笑顔に向けている子どもたちが多いことに気付きます。

笑顔を絶やさないモンゴル遊牧民の子どもたちは、一体どんな生活を送っているのでしょうか？

西村氏によれば、子どもの成長の一番の目的は「自立」ということです。ですから、子どもたちは歩き始めると、もう大人の仕事をしよう見まねでやろうとしますし、大人も子どもがやりたいようにやらせるのです。このような環境ですから、2歳くらいの子どもがトナカイを連れて歩き、5歳くらいで馬に乗るようになるのです。

また、モンゴルでは子どもが子どもを育てる、という話もされました。子どもたちはいつもみんな集まっていて、

そこで年上の子どもが年下の子どもたちの面倒をみるのだそうです。年輩の参加者から、自分が子どもの頃もそうだった、という感想が聞かれました。



解説会の様子

(学芸グループ 種石 悠)

ロビー展

オホーツクシリーズ⑬ 北の状景から

2020.1.4-1.19

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の13回目として、この時期恒例となった写真展「北の状景から」を開催しました。このロビー展では、オホーツク地域の自然や街の風景、動植物などを撮影したアマチュア・カメラマンの作品を展示してきました。今回は坂森ナミさん、橋本郁也さん、三浦奈津美さんの3名に、それぞれ10点ずつ出展していただきました。

坂森さんの作品は、特に色彩の鮮やかさや幅広さに目を惹かれました。単調になりがちな冬の風景でも、厳しい寒さを感じさせる青みがかった樹氷、朝焼けの光を写すオレンジ色の流水、ピンク色から薄紫色のグラデーションの新雪など、思いもよらない色を見せてくれました。

橋本さんの作品では、地域の人にとってはなじみ深い風景のなかに、一点だけ目を惹くポイントが含まれているものが印象的でした。例えば「春の褒美」という作品では、広々とした緑の野原のなかに満開の桜が1本だけ立っていて、その華やかさが際立っていました。



会場入口の様子

最後に、三浦さんの作品については、写真として切り取られた風景のバランスが美しく、知っている場所のはずなのに初めて見るような新鮮さを感じました。また、今回の作品のなかでは唯一人物写真が含まれていて、作品に独特の爽やかな雰囲気を感じさせてくれました。

ロビー展には観光客のほか、近隣の一般の方々や写真愛好家、観覧者数459名が訪れ、バラエティーに富んだオホーツクの状景を楽しんでいました。また、普段はスマートフォンで写真を眺めているという出展者の一人は、デジタルの画像と博物館のロビーにパネルとして展示された作品との違いを感じている様子でした。

(学芸グループ 中田 篤)

講座

サハ共和国での調査から

2020.2.15 13:30-15:00

講師：中田 篤（当館主任学芸員）

ロシア連邦サハ共和国の自然や伝統文化について紹介する講座を開催しました。講座では、学芸員による現地調査の成果を含め、3つのテーマに分けてお話ししました。

まず、「サハ共和国の概要」ということで、サハ共和国の位置、面積や人口、自然環境について紹介しました。特に冬の厳しい寒さについて、凍結した川の上に道路が整備されることや、市場で凍った魚が立てた状態で売られていることに注目が集まりました。また、地下に厚さ300～400mの永久凍土層があり、そのおかげで降水量が少ないにもかかわらず森林が発達していることには驚いた様子でした。

次に「サハの伝統文化」と題し、サハ共和国の主要な民族であるサハ（ヤクート）の文化、特に伝統的な生業であるウマの牧畜について紹介しました。かつてサハの祖先は南の草原地域で多くの種類の家畜を飼っていましたが、現在の居住地に移動する過程で寒さに強いウマとウシだけが残ったこと、現在はおもに仔ウマ肉を生産するためにウマが飼育されていることなどをお話ししました。参考資料として、北方民族博物館所蔵のウマの毛皮や馬乳酒用の木製カップ、ウマの尻尾の毛で作られた儀礼具などを会場に持ち込み、実物をご覧いただきながら説明しました。

最後に「サハ共和国の先住民文化」というテーマで、サハ以外の先住民、特にエベンキのトナカイ牧畜について現地調査の結果を中心に紹介しました。サハ共和国では、現在おもに食肉生産を目的にトナカイが飼育されていること、トナカイに騎乗したり、橇そりを引かせたりする文化が残っていることなどについて、ビデオを使いながら説明しました。

参加者の皆さんは、普段あまり目にすることがないサハの風景や伝統文化、日常的な人びとの生活に興味を持ってくださった様子でした。（学芸グループ 中田 篤）



冬の市場（サハ共和国/ヤクーツク、2012年2月、中田撮影）

講習会

はじめての歩くスキーツアー

2020.1.18 10:00-12:00

会場：道立オホーツク公園研修室、
公園内特設・歩くスキーコース講師：中川一弘氏、佐々木英明氏（網走市スポーツ推進委員）
中田 篤（当館主任学芸員）

共催：道立オホーツク公園

今年最初の教育普及事業として、歩くスキーの講習会を実施しました。この冬は雪が少なく、一時は開催が危ぶまれましたが、何とかコースを設営することができました。

まず、道立オホーツク公園センターハウスに集合し、北方諸民族のスキーについて、学芸員が写真や実物の民族資料を使って説明しました。伝統的な雪上移動手段として、スキーがユーラシア大陸の北方地域に広く分布していたことや、現在狩猟の際に使われる様子などを紹介しました。

その後スポーツ推進委員の皆さんの指導により、歩くスキーの体験をおこないました。最初にオホーツク公園の貸出用歩くスキー道具から、参加者それぞれの身長に合ったスキーやストック、靴を選びました。一般的なグレンデ用のスキーとは異なり、歩くスキーは幅が狭くて軽く、エッジと呼ばれる金属部品が取り付けられていません。また、靴のつま先部分だけがスキーに固定され、かかと部分は浮くような構造になっています。そのため、慣れないと安定せず、曲がるのも大変なのです。参加者のほとんどが歩くスキーを履くのは初めてということだったのですが、簡単に説明を受けただけでコースに出ることになりました。

コース上では、最初は慣れないスキーとストックに苦勞しながら、同行する指導者のアドバイスに従って進みました。ちょっとした雪の凸凹にスキーが引っかかって尻餅をついたり、下りではスピードが出過ぎないように滑ったり止まったりしながら、各自が自分のペースで歩きました。

最終的に、全参加者が1時間半ほどで約2.3kmのコースを歩ききりました。天候にも恵まれ、展望スポットでは、オホーツク海の向こうに連なる知床の山々を眺めることができました。



歩くスキーを楽しむ参加者たち
(学芸グループ 中田 篤)

令和元年度（2019年度）博物館収集資料について

令和元年度の当館収集資料について紹介します。主な資料群としては、カナダ・ユーコン準州に暮らす北方アサバスカンのもの、2014年3月に閉館したアマゾン民族館（鶴岡市国際民族資料館）旧蔵の北方民族に関する資料、そしてスウェーデンのサミ文化に関する資料です。



写真1

写真1は北方アサバスカンのノーザン・トゥショーニ、レア・サム氏が制作したモカシンです。モカシンとは、北米の先住民が用いる靴で、皮で足をおおうように作られます。写真の

モカシンには足首の周りにビーバー毛皮が使われています。足の甲部分は、花をモチーフにしたカラービーズがあしらわれています。

写真2は、アマゾン民族館旧蔵のロシア連邦ハバロフスク地方のナーナイの人形です。この人形の民族衣装は、えりやそでに刺繍がされ、ビーズが縫い付けられています。さらに靴は伝統的な魚皮で作られています。

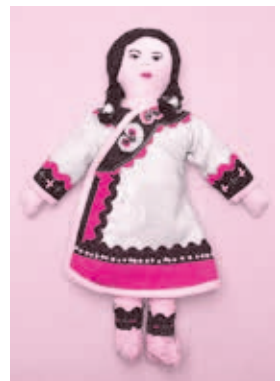


写真2

ほかのナーナイの人形をみても、どれもしっかりと作り込まれた靴をはいています。



写真3

最後に紹介するのは、サミの資料です。写真3はスウェーデン・ヨックモック地方のサミ文化伝承者のアンナ・リカント氏に製作を依頼した男性用帽子です。フェルト製の帽子で錫糸すずの刺繍ししゅうが施されています。この帽子と対になる女性用帽子も収集しています。サミの伝統的な衣服と帽子は、地域によってデザインが異なっており、衣服のちがいは各地域を特徴付けています。

このほかに映像資料の収集も行いました。またエベンキのトナカイ用塩入れ袋などの寄贈がありました。

(学芸グループ 宮本 花恵)

北海道立北方民族博物館総合案内第6版発行

初版の発行は平成5年（1993年）でした。第6版は常設展示室で入れ替えた資料の情報を反映させています。

北海道立北方民族博物館研究紀要第29号目次

令和2年（2020）3月刊

〈研究ノート〉

ノルウェーにおける沿岸小型捕鯨の歴史と変容：ミンククジラ肉のサプライチェーンを中心に 赤嶺 淳

サハ共和国ゴルヌイ郡におけるサハの野生ベリー類採集

藤岡悠一郎、大石侑香、田中利和

ナヂエージュダ・ヴィノクロヴァ

日本人によるアリュート民族の研究（2）：春日部薫著『アリュート語一班』（1942年）と注釈 大島 稔、野口泰弥

〈資料訳注〉

サハ共和国アルダン郡におけるエベンキのトナカイ牧畜用語集 S.R.ステパノフ 原著

中田 篤、津曲敏郎 訳注

〈資料紹介〉

宮城県丸森町宗昨院所蔵高野雅楽編「仙台藩土クナシリ和歌覚」について 宮本花恵

北海道湧別町川西オホーツク遺跡の未報告資料について

種石 悠

のりすと 2019

笹倉いる美

ロビー展 北海道土産と木彫り熊

北海道土産にみられる木彫りの熊や人形を展示します。戦前・戦後の北海道観光ブームと土産の変遷を紹介します。

■会期 令和2年（2020年）4月18日（土）～5月10日（日）
（期間中の休館：4/20、5/7）

■会場 北海道立北方民族博物館ロビー
観覧無料

■主催 北海道立北方民族博物館



1934年に寄贈者の父が更科源蔵氏から贈られた木彫り熊(当館所蔵)
(12.5×w5.3×h7.6)

INFORMATION

行事報告

◆12月14日（土）はくぶつかんクラブ「革とフェルトでつくるオリジナルカレンダー」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。世界で一つ！オリジナルのカレンダーをつくりました。



自分だけのカレンダーづくりに挑戦

◆12月26日（木）今年も札幌交響楽団員のディパスクアーレ・ヴィンチェンツォ氏、福井岳雄氏、鈴木勇人氏、猿渡輔氏をお招きし、ロビーコンサート2019「青少年のための室内楽の夕べ」を開催しました。

◆1月25日（土）はくぶつかんクラブ「かんじき体験」(講師：野口泰弥学芸員)を開催しました。動物たちの足跡をたどりながら雪の上を散策しました。



かんじきで森の中を歩いて雪遊び

◆2月2日（日）解説会「企画展展示解説会」(講師：野口泰弥学芸員)を開催しました。



企画展「北のファーストネーションズ」解説会

◆2月9日（日）は、第30回北方民族博物館開館記念感謝DAYとして無料開館しました。当日は、トナカイそり体験、おしるこの試食、マグネットづくり、かんじき体験を実施しました。さらに紙しばいの会玉手箱さんに協力いただき、紙芝居と絵本の読み聞かせを行いました。



トナカイそり体験

学芸員実務実習

◆1月28日（火）～2月2日（日）の日程で学芸員実務実習を行い、3名の大学生を受け入れました。

北方民族博物館だより
No.116

令和2年（2020年）3月17日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会